

社会は心を撃つ写真をさがしています

第24回
林忠彦賞



ブロンズ像
笹戸千津子作「爽」

STREET RAMBLER

写真展

□東京展 富士フィルムフォトサロン

4月17日(金)→4月23日(木) 会期中無休
10:00~19:00(最終日16:00まで)
東京都港区赤坂9-7-3 東京ミッドタウン フジフィルム スクエア TEL(03)6271-3351

□周南展 — 林忠彦の生誕地にある — 周南市美術館

5月15日(金)→5月24日(日) 月曜日休館
9:30~17:00(入館は16:30まで)
山口県周南市花島町10-16 TEL(0834)22-8880

□東川展 写真の町 東川町文化ギャラリー

11月29日(日)→12月13日(日) 会期中無休
10:00~17:30(最終日15:00まで)
北海道上川郡東川町東町1-19-8 TEL(0166)82-4700

編集・発行／林忠彦賞事務局

周南市美術館 〒745-0006 山口県周南市花島町10-16
TEL(0834)22-8880 FAX(0834)22-8886

<http://hayashi-award.com>



発行日／平成27年3月31日 印刷／大村印刷株式会社



主催／周南市文化振興財団 共催／**KRY**山口放送 後援／読売新聞社 協賛／富士フィルム株式会社

<http://hayashi-award.com>

林忠彦賞は、山口県周南市出身の写真家林忠彦の功績を顕彰し、写真文化の振興を目的に、1991年(平成3)故郷である周南市と周南市文化振興財団が創設いたしました。

本賞は、林忠彦が晩年アマチュア写真家の育成に力を注いだことから、当初はアマチュア写真の振興を目的としてスタートいたしました。その後、写真がデジタル化へと急速に変化するなど、技術や表現形態が多様化していったことを受け、より多くの写真家に支持される賞へと少しずつ見直しを図ってまいりました。そして現在では、林忠彦が「太宰治」「坂口安吾」などの作品で戦後の写真界に颯爽と躍り出た、最もエネルギー溢れる時代に照準を合わせ、社会が求める、その時代を一番象徴する写真を選び出そう、をコンセプトとしています。

「社会は心を撃つ写真をさがしています」のキャッチフレーズのもと、写真表現者すべてに門戸を広げ、林忠彦の精神を受け継ぎ、それを乗り越え未来を切り開く写真家を発掘する賞をめざしているところです。

第24回目となる今回は、去る1月24日に選考委員会が行われ、116点の応募作品の中から厳正な審査の結果、中藤毅彦さんの「STREET RAMBLER」が受賞作に決定いたしました。

中藤さんは東京を中心に精力的に活動されている気鋭の写真家です。これまで主に、世界各地の都市をモノクロームのスナップショットで撮影した作品を発表してこられました。今回の受賞作「STREET RAMBLER」には、2002年から2014年にかけて撮影された、ニューヨーク、ハバナ、モスクワ、上海、ベルリン、パリ、そして東京の各都市の風景が掲載されています。中藤さんは、これらの都市の歴史的意味や過去の多くの作品と向き合い、街を歩き、風景とそこに生きる人びとを新しい感覚で捉えました。さらに卓越した技術で表現された、粗い粒子と白黒のハイコントラストの画面は、都市の姿をより生き生きと伝えてくれます。

中藤さんには心からお祝いの言葉をおおくりさせていただきますとともに、今後のさらなるご活躍を期待いたします。

受賞作品は山口放送株式会社、読売新聞社、富士フィルム株式会社をはじめ、関係各位のご協力を得て、東京、周南市、北海道東川町と巡回展示し、オリジナルプリントは周南市が林忠彦コレクションに含めて永久に保存いたします。

林忠彦賞は、多くの方々のご協力によって発展して参りました。今後とも引き続き温かいご支援を賜りますようお願い申し上げます。

周南市文化振興財団理事長
周南市長

木村 健一郎



林忠彦
(1918~1990)

わが国の写真文化の発展において、林忠彦は木村伊兵衛、土門拳、渡辺義雄各氏などの先輩写真家とともに日本写真家協会設立に尽力する一方、1953年(昭和28)には二科会写真部を創設し、以後全国のアマチュア写真家の資質向上のため終生尽力した。こうした氏の遺志を生かしアマチュア写真の振興を目的に、1991年(平成3)林忠彦賞を設立した。

第12回からは、デジタル化の急速な進歩により多様化する表現形態に対応するため、新しい写真表現を目指す作家の参入も推し進めた。

さらに第18回より、これまでの経験をもとに、対象をプロ作家にまで広げ、時代と共に歩む写真を撮り続けた林忠彦の精神を継承し、それを乗り越え未来を切り開く写真家の発掘を目指す賞へと拡大した。

作品募集要領

■資格

国内居住であれば、アマチュア、プロ、年齢、性別、国籍を問いません。

■テーマ

自由

■対象

2014年(1月1日~12月31日)の写真展、写真集、カメラ雑誌、いずれかの表現媒体で、すでに発表された作品に限ります。受賞記念写真展を開催する関係上、同一作品でプリントが35~70枚程度の作品が対象です。

■規定

- ・応募作品には、住所、氏名、電話番号、略歴を明記のうえ、制作した主旨を400字以内にまとめてお送りください。
- ・カラー、モノクロ、デジタルは問いません。すべて六ツ切から四ツ切までのプリント(インクジェットプリントも可)で提出してください。できるだけファイリングした状態でご応募ください。
- ・写真集の場合は、その本をお送りください。資料としてプリント作品を添付されてもかまいません。
- ・写真展、カメラ雑誌、一般の雑誌や新聞、コンテストなどの場合は、プリントと発表状況がわかる資料(案内ハガキ、掲載記事等)を添付してください。

■作品の返却

返却方法は、受取人着払いの宅配便となります。ただし、最終候補作品については、作品をご提供いただく場合があります。

■選考委員

大石 芳野(写真家)
笠原美智子(東京都写真美術館事業企画課長)
河野 和典((公社)日本写真協会理事、日本カメラ社編集顧問)
細江 英公(写真家)
有田 順一(周南市美術博物館館長)

(敬称略・五十音順)

■締切

2014年(平成26)12月31日必着

■賞

ブロンズ像(笹戸千津子作「爽」)及び賞金100万円。

■選考発表

- ・授賞式は東京で行い、東京と周南市において受賞記念写真展を開催します。
- ・審査後、受賞者に通知するとともに各報道機関に発表します。(2015年2月19日発表)
- ・受賞作品は主催者が保存のため銀塩ペーパーで再制作し、林忠彦コレクションとして周南市美術博物館に永久保存します。

■個人情報

ご記入いただいた個人情報は、林忠彦賞に関する業務以外には使用しません。

■応募先/主催

公益財団法人 周南市文化振興財団(周南市美術博物館)
林忠彦賞事務局
〒745-0006 山口県周南市花島町10-16
TEL(0834)22-8880/FAX(0834)22-8886
URL <http://hayashi-award.com> (林忠彦賞)
<http://s-bunka.jp/bihaku/> (周南市美術博物館)

写真集「STREET RAMBLER」

中藤毅彦 (なかふじ・たけひこ)



東京で生まれ育った作者は、一貫してストリートスナップを撮り続けてきた。世界各地の都市を訪ねるうちにそれぞれの雰囲気の違いに興味を惹かれ、2001年に初めて東欧の旧社会主義国を訪れてからは、さらに都市の持つ歴史的意味合いにも思いを馳せるようになった。「STREET RAMBLER」にはこのような観点から、キューバの首都ハバナに始まり、ニューヨーク、モスクワ、上海、パリ、ベルリン、そして東京と、20世紀、劇的な変化を遂げた各都市の姿が収められている。

これらの都市についてはまた、過去に多くの写真家が題材とし、優れた作品を残してきた。作者はそれら先達の作品とも向き合い、敬意を払った上で撮影に取り組んだ。街に身を置き、ひたすら歩き、そこで出会った人びとや予期せぬ光景に反応し、様々な角度からシャッターを押し、風景とそこに生きる人びとを新しい感覚で捉えてきた。

さらに、卓越した技術で表現された、粗い粒子と白黒のハイコントラストの画面は、作品のテーマとなる「都市」の姿を、より生き生きと見る者の眼に訴えかけている。ドキュメンタリーでもアートだけでもない、そうした魅力にあふれた作品である。



NEW YORK

経歴

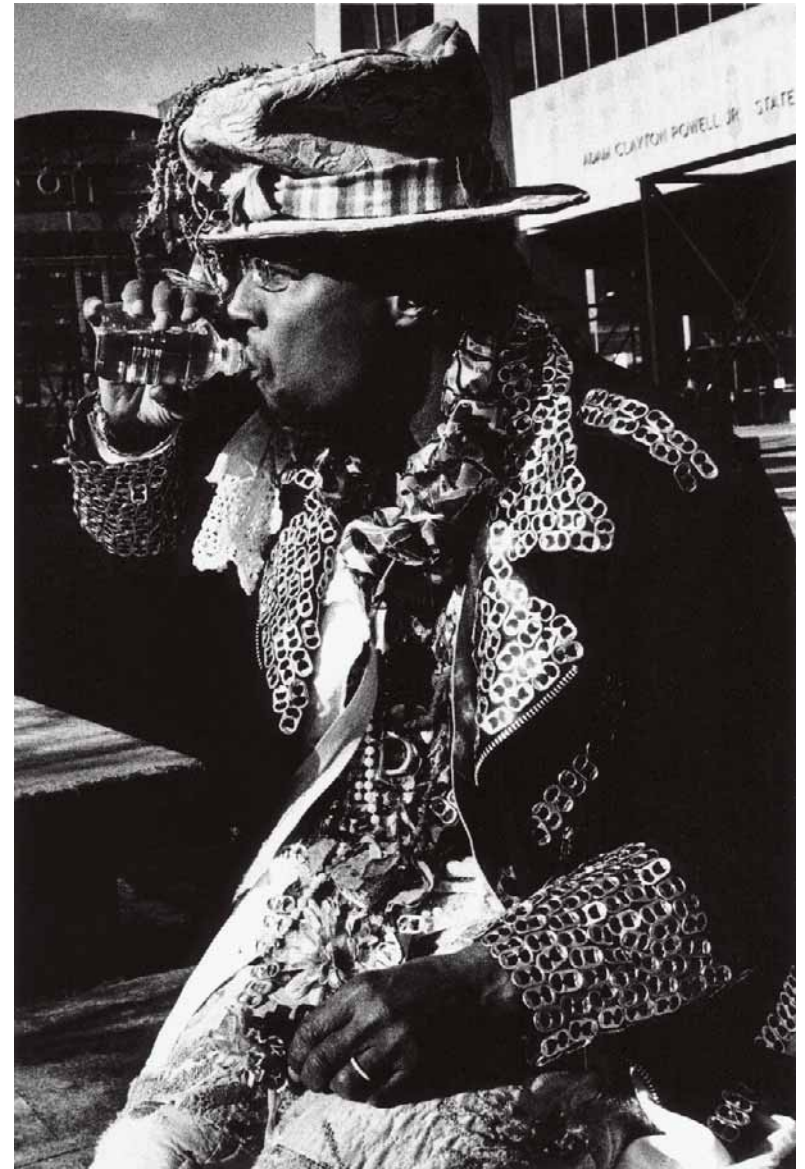
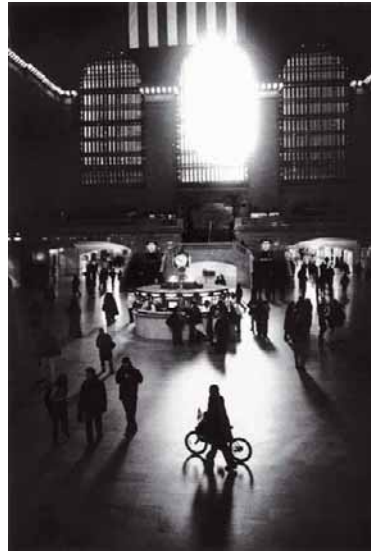
- 1970年 東京都生まれ
- 1992年 早稲田大学第一文学部中退後、東京ビジュアルアーツ写真学科入学、森山大道に学ぶ。在学中より、モノクロームの都市スナップショットを中心に撮影を続け作品を発表している
- 1994年 東京ビジュアルアーツ写真学科卒業
写真展「肖像」
- 1995年 写真展「NIGHT CRAWLER - 虚構の都市への彷徨」
- 1997年 写真集「Enter the mirror」
- 1998年 写真展「Enter the mirror」[Voluptuous]
- 1999年 写真展「Winterlicht」
グループ展「フォトディメンション-写真の拡がり-」
- 2000年 写真展「Enter the mirror」韓国 ソウル
「Snap Shot 1995-2000」
「Deep Seoul」
東京渋谷区代官山でギャラリー-ニエブス運営(2003年 新宿区四谷三丁目に移転)
- 2001年 写真展「Bucuresti Days」
「From Hanoi to Saigon」
グループ展「STAGE NEXT」
写真集「Winterlicht」
- 2002年 写真展「One Rainy Night」
- 2003年 写真展「Deep Habana」[TRANS JAPAN]
「STREET RAMBLER」

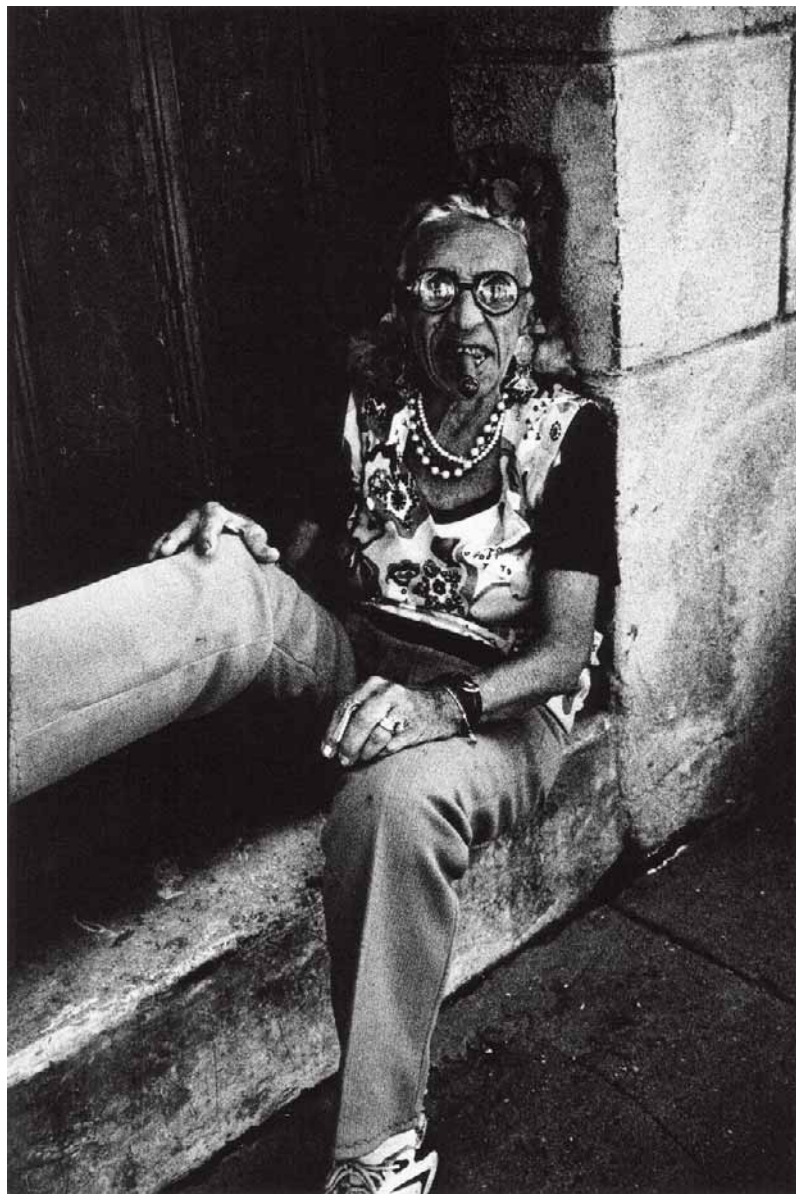
- 2004年 写真展「STREET RAMBLER 04」
グループ展「クラブパラディーン」
- 2005年 写真展「STREET RAMBLER -New York」
グループ展「Fragments of Reality」ブルガリア国立美術館
- 2006年 写真展「From Bulgaria」
「STREET RAMBLER -上海」
「STREET RAMBLER -Russia」
「atmosphere」
- 2007年 写真展「Fragments of Reality」
「異郷-EXOTICA」
「La Vien Rose」
グループ展「a just report」
- 2008年 写真展「STREET RAMBLER -Vancouver」
「マタパアン」
グループ展「大ニエブス展」[forever FORTE]
- 2009年 写真展「Bulgaria」[TOWER]
「С А Х А Л И Н -サハリン」
グループ展「VS 熱海展」
- 2010年 グループ展「タムロン中藤毅彦ワークショップ終了展」
- 2011年 写真展「Night Crawler 1995&2010」
「Winterlicht」フランス パリ
「Aquarium」
グループ展「純喫茶ニエブス」

- 「PORTRAITS 写真家と被写体の距離」
「no found photo」フランス パリ
「写真の早慶戦」
写真集「Night Crawler 1995&2010」
- 2012年 写真展「Street Rambler -Russia」
「Street Rambler -New York」
グループ展「VS 浪速展」
「world wide@Young Portfolio」
「ASPHALT 写真展」
「ゼラチンシルバーセッション」
「no found photo」フランス パリ
- 2013年 写真展「Sakuan, Matapaan -Hokkaido」
写真集「Sakuan, Matapaan -Hokkaido」
同作品で第29回東川賞特別作家賞受賞
写真展「Bucuresti Day」
「Street Rambler - Barcelona」
「Enter the mirror」フランス パリ
「Paris」フランス パリ
グループ展「VS. 神田展」[VS. 神田展+]
「ゼラチンシルバーセッション」
「植田好き」
「The Secret」
写真集「Paris」[FUNNY BONES EDITION刊]フランス
「NODE」[共著]

- 2014年 写真展「Paris」
「届かない悲鳴 共同通信連載企画」
「Paris 1996」
「Une Rétrospective.」フランス パリ
グループ展「Contrasted Places」フランス パリ
「VS. 荒木町写真展」[原点を永遠に。]
「NODE」
「JAPANESE EYES」フランス パリ
「photo off」フランス パリ
「表出する写真、北海道展」
写真集「STREET RAMBLER」
- 2015年 写真展「STREET RAMBLER」[ICE and SNOW]
- コレクション
1999年~2005年
清里フォトアートミュージアム (ヤングポートフォリオ) 67点

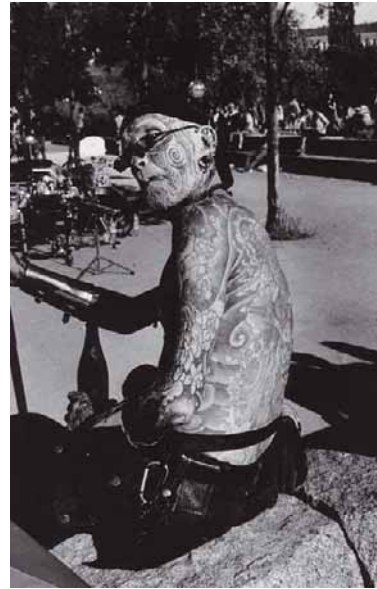
web <http://takehikonakafuji.com/>
 f <https://www.facebook.com/takehikonakafuji>
 t <https://twitter.com/nakafujitake>



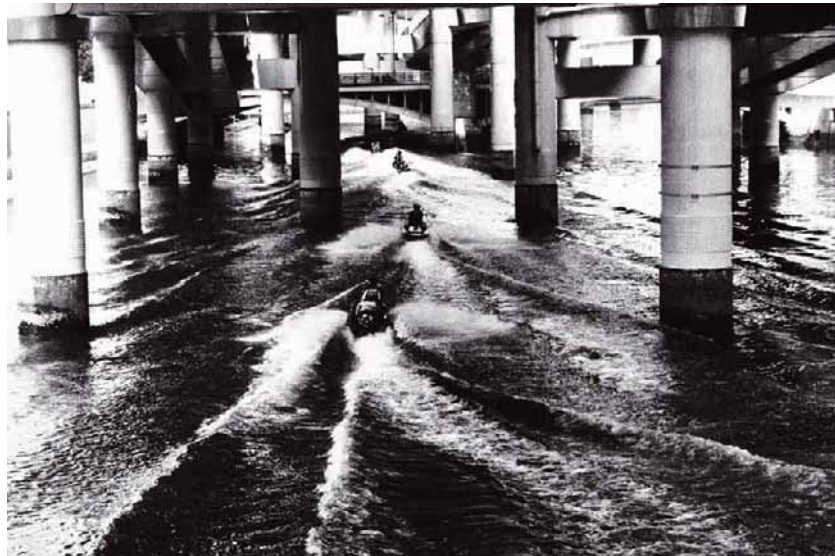












「標高4000Mの祈り」(写真展・新聞)

浅井寛司

「このような 残暑 。」(写真展)

荒井玲子

「島語り」(写真集)

小川康博

「STREET RAMBLER」(写真集)

中藤毅彦

「STILL CRAZY Nuclear power plants as seen in Japanese landscapes」(写真展)

広川泰士

「Life Studies」(写真展)

藤岡亜弥

「六花」(写真集・写真展)

松谷友美

「prana」(写真集)

渡部さとる

(敬称略・五十音順)

委員長 細江英公

林忠彦賞は、たくさんある写真賞の中でもレベルが高いと思います。応募される作品はあくまでも作品本位で、他のコンテストにはない自由な雰囲気があります。選考委員としても、少しでも皆さまのお役に立てばという気持ちで選考しています。

林忠彦賞の最終候補に入ると、これがご自分の写真歴に加わります。これはとても重要なことで、写真が好きというだけではなく、もっとご自身のレベルアップを目指す上で、この記録の意味が深まります。林忠彦賞は作品本位で日本全国の方々が応募できますから、大いに応募してもらいたいと思います。主催者の周南市の方々、選考を担当している私たち選考委員、市民のみなさんも、大変期待を持っております。

林忠彦賞という事業を地方市のレベルでやるのは、予算や時間の面から大変なことだと思いますが、非常に価値のあることです。意欲のある写真家の皆さま方は、ぜひこの賞を目標に、優れた作品を応募してください。

林忠彦賞に選ばれた中藤毅彦さんの作品「STREET RAMBLER」は、ニューヨークやパリ、上海、東京などを撮影しています。

ニューヨークと言えば、世界中の写真家がニューヨークを主題に撮影しています。古いところでは19世紀、20世紀初めくらいからで、一番有名なのは1950年代、ウィリアム・クラインという写真家の「ニューヨーク」という写真集でしょう。フィルムの粒子をわざと荒らした感じで、朝から夜まで静かになることはないと言われるニューヨークの喧騒を表現しています。当時の若い日本の写真家たちも、ウィリアム・クラインの写真に随分影響を受けて、そういうものを作りました。僕なんかもそうで、あえて写真の方向を粒子の荒れたような感じにする。画面よりもフィルムの粒子にピントを合わせて引き伸ばしをするという技法で、それで写真が荒々しく見える。粒子にピントを合わせますから、大きく伸ばしたときでも鮮やかに見えるんですね。白と黒のコントラストがありながら粒子が粗いというのは、平和な時代というより荒々しい時代を表現する、そういう効果があります。

そういうことを僕は体験していますので、中藤さんのような粒子を荒らしたような写真が出てきたりと懐かしさが込み上げてきます。ニューヨークや東京のような大都会は、そういう粒子を荒らした写真を作ることはまだまだ有効だと思うんですね。

モノクロ写真の特徴として、白と黒のコントラストをつけることも、暗室の中で自分の好きなようにできます。写真の面白さは撮影だけではないんですね。撮影したフィルムをどのように処理するか、これも重要な表現の要素です。ですからできるだけ自分で現像して、その方法を色々覚えてみる。ただ普通に現像するのではなく、例えば現像液の温度を上げてサッと現像するとか、色々なことを暗室の中でやることができます。現像で自分の好きなように持っていくというのも写真表現の一部ですから、他人やDPE屋さんをお願いするのではなく、できれば自分でやる。それも色々テストして自分の好きな調子を得るとか、様々なことができます。そうすると表現の幅が広がりますね。これで写真が何倍も面白く

なります。かなりのベテランの人はそれを全部自分でやっていますから。これはとても大事なことだと思います。

今回応募された作品を見ますと、上位にいる人たちは、大体において自分で処理をしている人が多いように感じます。カラーの場合には、またちょっと複雑な処理をしなければいけないので自分でやる人は少ないですが、モノクロ作品を応募された方は自分で処理をするということに思い切って飛び込んでみる。全部写真屋さんにやってもらうのではなく自分でやる。そういう勉強をすることでモノクロの写真表現の幅が広がります。とても重要なことですし、もうひとつはそれが面白いんです。面白いから止められなくなります。自分で印画紙の引き伸ばし処理をするようになると、写真の面白さが2倍3倍に膨れ上がるということです。

渡部さとるさんの「prana」という写真集。最近ご自分で写真集を作られる方が増えてきました。写真集を作ってみて、写真の面白さが何倍にもなり、同時に自分の作品が本として残り、多くの人たちの目に留まるといった良さがあります。写真を1枚人にあげるよりも、何十枚かの写真を作品集として本にして友人に贈るということは、とても嬉しいことなんです。また、もらう方もそれを大事にして10年も20年も持っていてくれます。写真の面白さのひとつに写真集を作る、ということもありますので、ぜひ先輩や色々経験のある方に話を聞いて、写真集作りの勉強をしていただければと思います。

小川康博さんの「島語り」。タイトルが面白いですね。島語り、島を語る。島と言っても、この方は離島へ行っています。日本は島国で、一番大きいのが本州、南の方から九州、四国、北海道があります。しかし我々が島と言っているのはそんなに大きな島ではなく、瀬戸内海や沖縄、あるいは九州の離島であったりします。そういう島は、写真の題材が色々ありますから面白いと思います。小さな島の良いところは、ひとつの島で朝日と夕日、太陽が水平線から昇るところと沈むところが撮れるということです。また夏は夏、冬は冬と季節の変化があるところをうまく利用して、変化に富んだ風景写真が撮れるということです。島というのは色々な意味で本当に面白い題材がありますから、日本の島を題材に写真集を作る、そういう大きな夢を持ってお撮りになったらいかかでしょうか。

松谷友美さんの作品で「六花」。六つの花と書いて「りっか」と読むんですね。秋田県、青森県、岩手県等々、北の方を中心に、街の風景や家の玄関先、あるいは列車の中とか、自分の身のまわりのものをお撮りになっていらっしゃる。風景写真というのは、遠い所には電車やバスで行きますけれど、現地へ降りたらやはり相当歩きます。歩くことと写真を撮ることは一対になっているのね。それで色々なものに出会う、被写体を見つける、それが楽しみなんです。知らない所を歩くのは半分不安ですが、色々なものが新鮮ですし、知らない人と出会うということもあります。

松谷さんの写真は素直ですね。サツと撮っているという感じがよく出ています。カメラを持って歩くと「あっ、あの桜が綺麗だ」とか「あ、この雪が良い」とか、知らない間に風景に引っ張られて色々な所を歩きます。無意味に歩いていませんから、疲れはしますけれど心地よい疲れで、そこで一枚傑作が撮れたりすると、「早く現像したいな」って疲れがなくなるんですね。疲れないというか喜びに満ち溢れます。いつもポケットにカメラを忍ばせている、カメラと自分が常に一体であるということが、そういう

写真を撮らせてくれることになるわけですから、傑作は常に身のまわりにあるということ、どうぞ忘れないでください。

浅井寛司さん「標高4000Mの祈り」。これはまさに標高4000Mの高地に住んでいる人たちを撮っています。この方もカラーで撮っています。カラーで撮らないと、このカラフルな雰囲気は出ません。

数珠を持って祈っているところなどを綺麗に撮っています。こういうところで写真を撮るのは、なんとなく気恥ずかしい感じがしますが、たぶんお祈りの声でシャッターの音が聞こえなくなる、そういう時を利用して撮っているんでしょうね。また、ある写真では、手前にフードを頭から被った方が背中を見せ、その向こうの島にたくさんの白い壁の家があります。これはよく目立ちますね。豆粒のようにポツポツと本当に素晴らしい。そしてその向こうには雲が広がり、右の方に金色の雲、これは珍しいです。おそらくこういう場所に行かないとないんじゃないでしょうか。あるいはこの方の、写真家の幸運がこうした金の雲を呼び寄せたということも言えるかもしれません。

また、とても驚きの目で見ている写真があるんです。それは何百という長屋でしょうか、十軒ぐらい一緒の建物がずっと山にへばり付いているという感じの写真で、上の方の人が下まで降りてくるのはとても大変だな、というようなことを思いながら見せてもらいました。けれども、そういうところへ行っても、ちゃんと撮って良い写真ができると、どんなに疲れても疲れた感じがしないんですね。疲れてもそれは心地よい疲れです。だから写真って素晴らしいんですね。やはり写真、特に風景写真は歩くことです。車で行って、降りて、パッと写真を撮って、また車に乗ってなどということをやっている限りは、こんな素晴らしい写真は撮れません。

荒井玲子さん「このような 残暑。」。この方の写真も凄いです。地震の跡ですが、カラーで撮って良かったです。モノクロだとちょっと味気無いけれど、カラー写真だと色が出ているでしょう。カラーの持つ本当の価値というのは、こういうことでしょう。

スツと全体を撮って、グツと寄って、日常品が乱雑に捨てられているような感じを撮るとか、いろいろとアングルを変えて、近寄りたり離れたりしながらお撮りになると、写真に深みが加わり、多面的に色々な面から見ることで、物語性が広がってくるという、そういう特徴があります。

「Life Studies」藤岡亜弥さんの作品。Life Studiesという本があり、それが広がって出てきたページを開けると、Life Studiesと書いてある。それを写真集のタイトルにしたということですね。本には泥みたいな汚れが付いている。この本の歴史が語られているという感じです。写真を見ていくと、子どもが遊び、尼さんがカメラで写真を撮っている。尼さんが写真を撮るなんていうのは面白いじゃないですか。あまりにも普通の感じがするのね。それから女の写真。手前の女性は顔を撮ればいいのに、顔を半分切って、足首のところで終わってしまっているような不思議な撮り方をしている。これもひとつの面白さの中に入っているのかもしれない。普通にこの女の人がいるところだけを撮ったならば、それはまあ普通の写真なんです。それをちょっとアングルを変えたり、切り口を変えたりして、写真に面白さを出したケースですね。このように不思議な写真が色々あるところが面白いです。

広川泰士さん写真集「STILL CRAZY」、原発、原子力発電所、53基の原子炉というタイトルです。写真を見ますと、美しい浜辺、綺麗な松がみえます。海岸で楽しく海に入ったりして遊んでいる、そのちょっと向こうを見ると、遠くに巨大なガソリン貯蔵庫のような原子力発電所が見える。美しい風景が不気味になってしまっているという一例でしょう。なんとなく不気味な大きな筒のようなものがバンバンとある。これは原子力のエネルギーが入っているのでしょうか。作られた電力は送電線を通して街の方へ行く。なんでもない平和な風景だけれど、よくよくこれを見てみれば、平和というか幸せな家庭を保つための原子力という、極めて矛盾するものがここにあるわけです。この原子力発電所が無ければ、我々はこの写真集を見ることができない。電力があつてこそ、この写真集を見られる。これは物凄く矛盾な感じがします。怖い感じもします。非常に無機質な感じがね。この風景が良いとか悪いとか、そういう言葉は一切ないわけですから、どう見ようと見る人の勝手なんですけれど、勝手なのが現代ということでしょうか。

委員 大石 芳野

中藤毅彦さんの「STREET RAMBLER」は、ニューヨーク、ハバナ、モスクワ、サンクトペテルブルク、ベルリン、上海、パリ、東京などの大都市の街の人々、すれ違った人々、あるいはそこにいた人々を、2002年から2014年まで長年にわたって、モノクロームのフィルムで撮影した写真集です。荒れた粒子と際立った白と黒のトーンの仕上げが作者の独特の写真表現です。この写真集全体の特徴は、単に通りすぎりにちょっと撮ってみたという以上に、自分を写し込んでいることです。

今回の応募作品には街頭撮影の写真が多かったし力作もありましたが、そうした類の中の代表的なものだと思います。彼らの生活にも踏み込んだ奥深さが伝わってきます。モノクロームのはっきりしたトーンは、意図と表現方法のはざまの悩ましさの果てに見つけた中藤毅彦ワールドでしょうか。都市を撮る難しさの一つは、作者がなかなか写らない、というか、呑みこまれてしまう、弾き飛ばされてしまう、といったことでもあるでしょう。そのせいか、街を撮ると、得てして他人物語になりがちです。むしろ、テーマによってはその方が相応しいこともあります。表現者としては、意識的に自分を消そうとしない限り、なぜここでシャッターを押しのかといった思いが写ることは大事なことでしょう。

渡部さとるさんの「prana」。サンスクリット語の「風」を意味し、撮影しながら自然界のエネルギーを体感しながら撮影したという白黒写真には、確かに日本古来の土着の信仰のようなものが感じられます。ドキュメンタリーというよりは美術的な表現を大事にしながら撮影し、構成している写真集です。それだけに画面が整っていて落ち着きがあり、モノクロームの重厚なトーンから静けさが感じられ

ます。日本ならではの自然と季節のなかに、古代の魂をも意識しながら作者は歩き回っていたのでしょう。これからもさらに深めながら続けて欲しいものです。

小川康博さんの「島語り」の写真集。これはあちこちの島から島をかかなりの歳月をかけて撮影しています。私も訪れたことがある島もあるし、全然知らない島もあります。この写真集を見る人は皆そのように思いながら見ることでしょ。島々の昔ながらの文化や暮らしが現代社会に振り回されていく様子を、作者はくっきりとした白と黒のトーンで伝えようとしています。広角レンズが多く水平線を斜めにした構図もあり、表現方法が先輩の写真を思い出ししてしまう雰囲気もありますが、しっかりと撮影していると思います。

荒井玲子さんの「このような 残暑。」は、あの2011年の3.11で自分の家が流されて家族を失った人がゆっくりと立ち上がりながら写真を撮り始めてきたという感情が滲み出ています。作者は家族を失い家も失いながらも、その直後から目を背けないで自分に起こった運命とも言える事態にレンズを向け続けました。2011年から2014年にかけての変化、防波堤などができて少し復興が進んでいるものの、失われた愛しい人たちは戻らない現実を改めて突きつけられ、愕然となったことでしょう。写真を見ながら胸がいっぱいになりました。私も震災直後に宮城県へ行きましたので、似た光景は目にしましたが、外部の者ではなく当事者が記録してきたことの意義をここに強く感じます。作者の一行とか二行の短い言葉もとても強い。さらりと書いてはあるものの、奥の深さに考えさせられます。荒井さんにとっては辛い記録だったでしょうが、とても意義深いものがあり、写真の原点と言っても過言ではない作品だと思います。辛さに気持ちが萎えることもあるでしょうが、今後も撮り続けて欲しいものです。

松谷友美さんの写真集「六花」。若い女性の写真によく見られるカラーでふわっとしたハイキー調の色が全ページにわたって続いています。さあっと見ると目がとまらない構成ですが、1点1点をじっくりと見るとそこには様々なものが写っていて、作者が歩いた軌跡が感じられます。「六花」とは雪の別称で、雪の結晶が六角形だと著者が書いているような調子で全体をまとめています。女性的な雰囲気漂っている写真です。

広川泰士さんの写真集「STILL CRAZY」。全国の53基の原子力発電所の総てをモノクロームで撮影したものです。これは福島も含めた全国の原発を隅々まで映し込もうという気合を持って、各地にある原子力発電所と対峙しています。一見すると建物だけです東電福島第一原発の爆発事故以降、これは日本の原発だということは当然、誰にでもわかりますから重い内容です。家々も、人々の暮らしも、原発のごく間近にあるということを改めて知らされます。万が一の時はどのようにして逃げるのかなあ、逃げ場はあるのかなあ、などといろいろ考えさせられる一冊です。

浅井寛司さんの「標高4000Mの祈り」。チベットの、宗教とともに生きている、人生は宗教にある、といった人びとの深い思いがこれらの写真に込められています。ぎゅっと寄り添いながら暮らしている人びとは、そういう所で生まれ、そして去っていく。この世は去るけれども魂は消えないといった思いでしょう。広大な大地でありながらも、詰め込まれたように建ち並んだ家々、そして大勢の一人

ひとりの息遣い。彼らの表情から、人生を意味深く送っていることが感じられます。

藤岡亜弥さんの「Life Studies」という写真は、解説によるとニューヨークでの4年間の生活を経験したとあり、その中から生み出された彼女の「Life」。日々の生活を友だちや仲間たちと共に過ごす様子の記録がさわやかに構成されています。

委員 笠原美智子

今回の選考はとても票が割れました。選考委員のそれぞれの指向性、評価がかなり分かれた印象です。逆に言えば、質の高い、クオリティの高い作品が多く集まっていたことの証明だとも言えます。

もう一つは、とても若い作家さんの応募と、キャリアをかなり積んだ、日本を代表すると言っていい作家さんの推薦による応募、両方目立ったことです。これはやはり、かなり選考委員を悩ませました。林忠彦賞の目的は、今までの作品の評価や実績に対して功労賞的に賞を与えるというものではないので、そういったキャリアも名前もある方については、逆に選ばれなかった面があります。それは作品の質云々の問題ではないと思います。今回は比較的中堅の作家さんが最終候補まで選ばれています。

林忠彦賞も票が割れました。賞をとった中藤毅彦さんは、ストリートスナップを長く続けておられる方です。彼の集大成ともいえる作品「STREET RAMBLER」が賞をとりました。本当に集大成というだけあって、彼のストリートスナップの長年の成果がここに昇華されていると思います。

それから、林忠彦賞にはもれましたけれど、渡部さとるさんの作品「prana」はかなり独自のものです。渡部さんだからこそできる祈りの表現を写真にしていると思います。私はこの作品にとても惹かれました。

もう一人作家を挙げますと、広川泰士さんの「STILL CRAZY」。これは今だからこそ日本人がちゃんと見なければいけない作品になっていると思います。53基の原発を写しています。それも淡々と写しているんですけども、何もドラマチックではない日常の光景の中に原発が普通に存在している、未だに存在しているという、日常の中の恐ろしさというのを感じます。広川さんはすでに写真家として重鎮とも言える存在だと思いますが、そのような方がこのテーマに取り組んでいることに感銘しました。

女性の作家もこのところずっと活躍が著しいですけど、今回は三人、最終候補作品に選ばれています。引き続き女性作家の活躍を、私は本当に期待しています。

委員 河野和典

今年の林忠彦賞の全体的な作品傾向としては、まず、海外で取材されたものと、国内で取材されたものに二分されていたことでしょう。それともう一つ、応募された作品を見渡すと、圧倒的にカラー作品が多かったのですが、最終段階に残った上位作品——特に私の頭の中の最終候補作品——では、モノクロームにすぐれた作品が多かったように思います。これら二つの事柄は当然のことながら、どちらが良いということではもちろんありません。

そんな中から今年の林忠彦賞には中藤毅彦さんの写真集『STREET RAMBLER』が選ばれました。ニューヨーク、ハバナ、モスクワ／サンクトペテルブルク、上海、ベルリン、パリ、東京の都市を、タイトル通り、彷徨し捉えたストリート・スナップです。中藤さんは現在44歳ですが、20歳代からずっと海外へ取材に行っていて、観光名所というのではなく、アメリカ合衆国や東欧諸国、それからキューバといった国の都市を丹念に回って作品にしています。いわばそれらをまとめた現時点での集成です。画面を覆う黒く沈み込んだトーンの中に人物を中心とした都市の光景がコントラスト鮮やかに浮かび上がっています。そのちょっとクラシックな描写は、中藤節とも言えるようなどっしりとした重厚さをたたえています。

次点の渡部さとるさんの写真集「prana」は、前々回の『da. gasita』と対をなす作品で、日本中を旅してまとめられたものですが、渡部さんが53歳になって会得したというか、「作品をつくるぞ」っていうのではなくて、風のごとく（「プラーナ」は「風」の意味だそうです）、とても柔らかいタッチで描かれた味わい深いモノクロームの秀作です。

そして次点の小川康博さんは2009年に写真集『Slowly Down the River』で日本写真協会新人賞を受賞されていますが、今回の写真集『島語り』は、北海道から日本海、東京都、瀬戸内海、鹿児島、そして沖縄の離島を約10年めぐってまとめられた労作です。その選び抜かれたショットは、とても地味で、もの悲しくもあるのですが、時の流れ、歴史の重みを滲ませて感動的です。

藤岡亜弥さんの『Life Studies』は、今審査で私のイチ押しのカラードラマチックな作品でした。昨年12月の銀座ニコンサロンでの写真展ポートフォリオですが、2008年文化庁の派遣でニューヨークに留学し、その後も2012年までニューヨークに滞在されたときの、いわゆる身辺雑記的なスナップ集です。非常に巧みに瞬間を捉えたショットの数々は洗練され、そのセンスの良さは高く評価できると思います。

浅井寛司さんの写真展で発表されたカラー作品「標高4000Mの祈り」は、文字通り標高4000メートルの広大なスケールの風景と祈りの人びとに圧倒されます。

横浜市民ギャラリーあざみ野で発表された荒井玲子さんの『このような 残暑。』は、岩手に郷里を持つ作者ならではの、津波からの復興を願う作品です。通りすがりの写真ではなく、地に足が生えた視点で捉えられています。

広川泰士さんの写真集『STILL CRAZY Nuclear power plants as seen in Japanese

landscapes』は、日本全国の原子力発電所施設を、まるでポートレートのように大型カメラで克明に捉えたモノクローム作品。今から21年前の作品集ですが、色褪せるどころかより一層リアルにそして静かに訴える労作です。

松谷友美さんの写真集『六花』は、六角形の結晶を持つ雪の別称だそうです。その雪景色と共に被写体は淡々と、等価に、愛嬌良く、ユーモラスに、人を引き付けます。

委員 有田 順一

やはり林忠彦賞は「旬」。今回も時代を捉えた鮮度が勝負であったように思います。

第24回は、新人から大家まで、さまざまなジャンルの作品が並びました。さらに初参加の作家の作品も多く、そのため、主旨を読み内容を把握するだけでもかなりの時間がかかりました。そういうことで最終候補作品8点の選出までは、各委員それぞれの主観が広範囲にちらばった感じです。

最終的には、脳裏のどこかに染みついている写真のかたちというか「STREET RAMBLAR」が大賞に輝きました。ストリートスナップを追求されている中藤毅彦さんの作品でした。いつも思うのですが、ストリートスナップは、最後の数点になるとすごく刺激的に見えてくるから不思議です。写真を並べると、色や形からいろいろなイメージが湧いてきますが、私の場合、ストリートスナップは「強い」という一語につきます。しかもハイコントラストで荒れた画面、まさに都市が唸ってる感じです。路上でおきている覆い隠すことのできない現実がそのまま捉えられているからだと思います。

写真集のなかに、若き青年と口輪をはめた熊を写した作品がありました。サンクトペテルブルク。このあたりの日常の公園の様子だそうです。もうこれだけで、わが日本との強烈な違いが見えてきます。ほんの一例ですが、このようにして見る人は、知らず知らずのうちにこの作品群のなかに引きずりこまれていくのではないのでしょうか。

この作品は、中藤さんが冷戦後の東西を代表する都市を見たいと、2002年から2014年まで、ハバナ、ニューヨーク、モスクワ/サンクトペテルブルク、上海、パリ、ベルリン、東京と取材されたもので、同時代の今が生々しく捉えられています。写真家を目指す人のひとつの生き方、そして表現方法だと思いました。

全体の傾向ですが、今を生きる私たちにとっては、やはり3・11東日本大震災の動向は外せません。すでに4年目に差し掛かろうとしています。政治、経済、文化などどの分野においてもいまだに大きな影をおとしています。それは写真家や表現者に置き換えても同じだと思います。ここに来て、すでに世紀を越えてまで追わなければならないテーマになっているのを感じました。

そういう意味では、昨年、一昨年と林賞受賞作品においてもその傾向はありました。

今回の応募作品にもこのテーマは何点が見られましたが、その類型も含めるとかなり広がっているものと思われます。将来、「やはりそうだったのか」というようなすごい作品が出てくるのを期待しています。

最後に、林賞の一筋の流れとなってきた女性の写真家、表現者。選には漏れましたが、これぞという作品はかなりありました。私は、その中からこれまでにない写真感覚をもち、新しい表現を試みている人たちが必ず登場してくるものと確信しました。

林忠彦賞は、時代とともに歩む賞です。「社会は心を撃つ写真をさがしています」はそんな皆さんの作品を待っています。今という時代をあなたの感性でぜひ作品にしてください。

これらの講評は、選考直後のインタビューに、各選考委員より後日加筆、修正を加えたものです。



選考委員会風景

大石 芳野 (おおいし・よしの)

東京都生まれ。日本写真家協会、日本民族学会、日本ペンクラブ会員。日本大学客員教授。日本大学芸術学部写真学科卒業後フリーの写真家となる。戦争や内乱後の人々の姿に視点を向けたドキュメンタリー作品を手がけ、アジア、アフリカ、ヨーロッパなどで取材を行う。

受賞—1982年(昭和57)日本写真協会年度賞。1990年(平成2)講談社出版文化賞、アジア・アフリカ賞、1994年(平成6)芸術選奨文部大臣新人賞。2001年(平成13)『ベトナム凜と』で第20回土門拳賞。2007年(平成19)紫綬褒章。2014年(平成26)『福島FUKUSHIMA土と生きる』でJCJ賞(日本ジャーナリスト会議)。他。写真集—2005年(平成17)『子ども 戦世のなかで』(藤原書店)。2011年(平成23)『それでも笑みを』(清流出版)。2013年(平成25)『福島FUKUSHIMA土と生きる』(藤原書店)。他。

笠原 美智子 (かさはら・みちこ)

1957年(昭和32)長野県生まれ。明治学院大学社会学部卒業。シカゴ・コロンビア大学大学院修了。1989年(平成元)から東京都写真美術館学芸員。現在、同館事業企画課長。著書に『写真、時代に抗するもの』『ヌードのポリティクス』など。主な展覧会企画に、1996年(平成8)『ジェンダー、記憶の淵から』展、1998年(平成10)『ラヴズ・ボディ―ヌード写真の近現代』展、2001年(平成13)『手探りのキッス、日本の現代写真』展、2008年(平成20)『オン・ユア・ボディ 日本の新進作家』展、2010年(平成22)『ラヴズ・ボディ―生と性を巡る表現』展、2012年(平成24)『日本の新進作家vol.11 この世界とわたしのどこか』展等。2005年(平成17)第51回ヴェネチア・ビエンナーレ日本館コミッションとして『石内都 マザーズ 2000-2005』展を企画。

河野 和典 (こうの・かずのり)

1947年(昭和22)鳥取県生まれ。1970年(昭和45)大学4年のときに(株)日本カメラ入社。1971年(昭和46)より月刊『日本カメラ』編集部。この間、『名機を訪ねて』(那和秀峻著)、『レンズ汎神論』(飯田鉄著)、『目からウロコ』(杉浦康平、若桑みどり、筑紫哲也、上野千鶴子、森村泰昌、池澤夏樹、石川好、竹村和子、中沢新一、小森陽一共著)などの単行本や別冊『ボラロイドの世界』を手がける。1999年(平成11)から2004年(平成16)まで月刊『日本カメラ』編集長。2008年(平成20)8月独立、同年10月写真よろずプロダクション(株)スタジオレイを設立。2009年(平成21)中里和人写真集『ULTRA』を制作・出版、2010年(平成22)写真集『新山清の世界vol.2・ソルントン時代』(COSMOSインターナショナル刊)、2012年(平成24)には由良環写真集『TOPOPHILIA』(COSMOSインターナショナル刊)、有野永霧写真集『日本人景 温泉川』(平凡社刊)を編集。2013年(平成25)から公益社団法人日本写真協会が制作・発行する『日本写真年鑑』に出版広報委員、理事として携わる。日本カメラ社編集顧問。

細江 英公 (ほそえ・えいこう)

1933年(昭和8)山形県生まれ。1954年(昭和29)東京写真短期大学(現・東京工芸大学)写真技術科卒業。1956年(昭和31)の第1回個展「東京のアメリカ娘」以来、海外、国内で写真展を多数開催。主な作品集に『おとこと女』『薔薇刑』『鎌鼬』『ルナロッサ』など多数。1970年(昭和45)芸術選奨文部大臣賞、1998年(平成10)紫綬褒章、2003年(平成15)英国王立写真協会創立150年記念特別賞、2007年(平成19)旭日小綬章、2008年(平成20)毎日芸術賞受賞。2010年(平成22)文化功労者。

有田 順一 (ありた・じゅんいち)

1955年(昭和30)山口県周南市生まれ。日本大学芸術学部写真学科卒業。1983年(昭和58)周南市文化振興財団勤務。1991年(平成3)林忠彦賞創設から事務局兼務。2010年(平成22)周南市美術博物館館長。林忠彦、秋山庄太郎、緑川洋一、細江英公、立木義浩、星野道夫、岩台光昭等の展覧会を担当。その他、周南市出身の洋画家 宮崎進、詩人 まど・みちおの顕彰活動を推進する。

(敬称略・五十音順)

歴代選考委員

秋山 庄太郎 (あきやま・しょうたろう) 写真家

植田 正治 (うえた・しょうじ) 写真家

大竹 省二 (おおたけ・しょうじ) 写真家

岡井 耀毅 (おかいてるお) 写真ジャーナリスト

齋藤 康一 (さいとう・こういち) 写真家

立木 義浩 (たつき・よしひろ) 写真家

田沼 武能 (たぬま・たけよし) 写真家

中村 正也 (なかむら・まさや) 写真家

奈良原 一高 (ならはら・いっこう) 写真家

緑川 洋一 (みどりかわ・よういち) 写真家

森川 紘一郎 (もりかわ・こういちろう) 元周南市美術博物館館長

渡部 雄吉 (わたべ・ゆうきち) 写真家 (敬称略・五十音順)

講評(抜粋)は第1回、2回、4回～11回は秋山庄太郎氏、3回、16回は岡井耀毅氏、12回は大竹省二氏、13回～15回は田沼武能氏、17回～21回、23回は細江英公氏、22回は大石芳野氏。



「カシュガル(喀什)」

第1回
「西域—シルクロード」(写真集) 後藤正治(ごとう・まさはる)

1946年(昭和21)東京都生まれ。祖父、父の影響で小学校から写真を始め、植田正治に師事した後、シルクロードをテーマに撮影を開始。学習塾経営のかたわら1990年(平成2)九州産業大学大学院芸術研究科(写真専攻)に入学、1992年(平成4)修了。2001年(平成13)第25回全国高等学校総合文化祭写真部門審査委員長。写真展開催、写真集出版多数。静岡県函南町在住。

作品は非常に格調も高く、作家の写真に対する真摯な情熱と、その作品集の持つ説得力に、選考委員長として敬意を表したい。いずれにしても、絶賛に値する作品が第1回目の林忠彦賞に選ばれたということは誠に慶賀すべき出来事だと思います。

web <http://www14.ocn.ne.jp/~mgotoh>



「山羊と少年
〈折々の詩〉」

第2回
「田園の微笑」(写真集) 捧 武(ささげ・たけし)

1933年(昭和8)新潟県生まれ。1955年(昭和30)頃から田園の風俗を撮り始める。1958年(昭和33)新潟県アマチュア写真連盟発足、以後30年にわたり事務局担当。1964年(昭和39)新潟県展にて審査員の林忠彦から奨励賞受賞。以後、県展や新潟二科展で入選入賞を重ねるなど活躍した。2007年(平成19)新潟県写真芸術協会発足、初代会長に就任。2010年(平成22)死去。

30年もの歳月をかけ写真集を作り上げた捧さんの作品が選考委員の皆さんの支持を得たということは、生前、特に晩年に林さんがおっしゃっていた「写真は記録であることを痛感した」という言葉に照らし合わせても、非常に妥当であったと思います。



「黒田家(小笠町) 堀をめぐらせた代官屋敷」

第3回
「静岡の民家」(写真集) 木村仲久(きむら・なかひさ)

1938年(昭和13)静岡県生まれ。日本大学工学部土木工学科卒業後、静岡県庁勤務。全日本写真連盟、二科会で活躍した。地元を中心に写真集団影法師を主宰するなど、静岡県写真界の指導的立場を務めた。故郷をテーマに写真展開催、写真集出版多数。1999年(平成11)死去。

静岡県内に点在する重要な旧家の重厚なたたずまいを、風土に生きてきた暮らしとの関わり合いで見つめたもので、格調高いカメラアイは決して単なる建築写真的なアプローチではありません。懐郷の思念も端正な構成の中に見事に抑制されて、写真家の肉声が、失われていく「家」の中を通り過ぎていきます。



「村の子供達」

第3回
「たかちほ」(写真集) 田崎 力(たさき・つとむ)

1920年(大正9)宮崎県生まれ。1941年(昭和16)九州医学専門学校(現久留米大学医学部)卒業。1951年(昭和26)頃からカメラ雑誌に応募し、土門拳に指導を受ける。二科会を中心に各コンテストで活躍。1996年(平成8)宮崎県文化賞(芸術部門)受賞。医学博士。2012年(平成24)死去。

長年にわたる氏の労作の総集編ともいべきもので、神楽の里の高千穂へ注がれる眼の優しさが格別です。さりげない描写の中にも伝承の風土の哀愴が深々と生きています。記録の美しさを改めて感じさせました。



「元陸軍一等兵 重河博之
ウマル・サントス・シガカワ」

第4回
「帰らなかった日本兵」(著書) 長 洋弘(ちよう・ようひろ)

1947年(昭和22)埼玉県生まれ。日本体育大学、武蔵野美術大学卒業。東京写真専門学校中退。1979年(昭和54)国際児童年記念写真展大賞受賞。1982年(昭和57)から85年(昭和60)までインドネシア・ジャカルタ日本人学校に勤務、ライフワークとなるインドネシア残留元日本兵の取材を開始する。1994年(平成6)「帰らなかった日本兵」、2007年(平成19)総集編となる「インドネシア残留元日本兵を訪ねて」刊行。他にも著書、写真展多数。埼玉県比企郡吉見町在住。

写真の力を十二分に発揮した作品といえるでしょう。一冊の本を書く作者の真摯な取材姿勢が強く伝わってきます。日本の戦後を考える上でも非常に貴重な写真的記録として評価でき、素材の力強さとしても文句のつけようがない作品でした。



「天城山 1994.10.8」

第5回
「追いつめられたブナ原生林の輝き」(写真集) 岡田 満(おかだ・みつる)

1946年(昭和21)大阪府生まれ。大阪府立大学2部法学部卒業後、大阪府立生野高等専門学校に赴任、聴覚障害生徒の職業教育に携わる。大学3年の時に写真を始め、1990年(平成2)からブナに魅せられ各地の原生林を追い続ける。1995年(平成7)それらをまとめた「追いつめられたブナ原生林の輝き」刊行。その後も取材を続け現在に至る。写真展開催、写真集出版多数。大阪府大阪市在住。

とにかく、すべてにわたってしっかりしています。装丁もすばらしいし、撮影している題材も良いものです。ブナは被写体としても地味ですから、あまり扱われてきませんでしたし、なかなかこれだけうまくまとめられないと思います。

blog <http://okaman.jugem.jp/>



「チーターの子ども」

第6回
「サバンナが輝く瞬間」(写真集) 井上冬彦 (いのうえ・ふゆひこ)

1954年(昭和29)東京都生まれ。東京慈恵会医科大学卒業。1987年(昭和62)初めて東アフリカを訪れサバンナの自然と動物をテーマに写真活動を始める。1996年(平成8)写真集「サバンナが輝く瞬間」刊行。現在はクリニックを開業し、医師、写真家としての眼で「生命とは何か」という問いに向き合っている。医学博士。日本写真協会会員、サバンナクラブ顧問。神奈川県横浜市在住。

サバンナの大自然の中で逞しく生き抜く野生動物たちの姿を、慈愛に満ちた温かい視線で捉え優れた写真映像に結実させており、長年にわたる作者のその努力と取材姿勢を高く評価したいと思います。



「父さんの仕事場は最高の遊び場所」

第7回
「ぼくは、父さんのようになりたい」(写真展) 井上暖 (いのうえ・だん)

1943年(昭和18)東京都生まれ。日本大学文理学部心理学科卒業。映画のスクリーン写真に魅せられて小学校の頃から写真を始める。1967年(昭和42)料理店経営を始める。1997年(平成9)写真展「ぼくは、父さんのようになりたい」開催。日本大学心理学科方寸会会員。東京都八王子市在住。

この作品は、自然光を生かした大判カメラによるガッシリした撮影で、その場の雰囲気と生活感を十分に取り入れ深みのある写真に仕上げられています。貧しいながらも家族の仕事に誇りを持って働く子どもたちの姿を、写真の基本ともいえる方法で取材した姿勢になにより好感が持てます。



「丙中洛(ピンツンロ)」

第8回
「天空の民」(写真集) 清水公代 (しみず・きみよ)

長野県生まれ。長野県立松本嶺ヶ崎高校卒業。46歳の時写真を始める。写真家小久保善吉に師事。写真活動を通して中国大陸に魅せられ、撮影テーマを主として中国少数民族の生活と文化に定める。1993年(平成5)まで取材活動を続け、1998年(平成10)写真集「天空の民」刊行。現在もアジアにおける少数民族の生活文化をテーマに取り組んでいる。日本写真家協会会員、日本写真協会会員、全日本写真連盟関東本部委員。東京都青梅市在住。

今回の受賞作については、アマチュアでありながらよくこれだけの作品ができたものだと感じました。これからも、作品作りに励んでいただきたい。



「鳥取県北条町下北条 1993年」

第9回
「Personal View [視線の範囲]」(写真集) 渡里彰造 (わたり・しょうぞう)

1935年(昭和10)鳥取県生まれ。鳥取県立米子南高校卒業。長男誕生を機に成長を記録するため写真を始める。植田正治に師事。山陰写真作家集団に参加、ニッコールコンテスト、二科会写真部展で入選受賞多数。日本写真協会会員、二科会写真部会員、二科会写真部鳥取県支部支部長、鳥取県写真連盟会長、鳥取県美術展運営委員。2012年(平成24)死去。

山陰地方の日常的な光景の中から、独特の鋭い感覚とユーモラスな視点で切り取られたモノクロスナップです。自分の視点をきちんと定めてコツコツと撮り続けていけば、身の回りのものでも立派な写真になり、大きな成果に結びつくという良いお手本になったのではないのでしょうか。



「大鹿歌舞伎」

第10回
「塩の道 秋葉街道」(写真集・写真展) 竹林喜由 (たけばやし・きよし)

1943年(昭和18)愛知県生まれ。静岡県立商業高校卒業。1972年(昭和47)から本格的に写真を始め、翌年写真集団影法師に入会(現在退会)。月例コンテストなどで多数入賞し頭角を現す。各所の写真講座講師を務め後進の指導にあたる。日本写真協会会員、全日本写真連盟関東本部委員、静岡ライカ倶楽部会長、静岡白黒写真同好会会長。静岡県藤枝市在住。

塩の道という歴史的な街道を丹念に取材した力作で、一つの大きなテーマに作者が精魂込めて取り組んだという情熱がストレートに伝わってくる作品です。晩年に「東海道」を上梓した林忠彦さんの業績を記念する賞に、内容的にも誠にふさわしい受賞作といって良いでしょう。

<https://www.facebook.com/kiyoshi.takebayashi.3>



「N列車 1999」

第11回
「ニューヨーク地下鉄ストーリー」(写真展) 角田和夫 (すみだ・かずお)

1952年(昭和27)高知県生まれ。高知県立高知工業高校卒業。大阪写真専門学校卒業。1988年(昭和63)「満月の夜」開催以降、写真展多数開催。1996年からは父の残した手記をもとにシベリア抑留の取材を始める。1999年(平成11)文化庁派遣芸術家在外研修でニューヨークのICP(国際写真センター)で研修を受ける。2006年(平成18)宮崎進&角田和夫2人展「シベリアから平和を考える」開催(高知県香美市立美術館)。日本写真作家協会会員。高知県南国市在住。

今回の作品はニューヨークの地下鉄を取材したもので、実に丹念に撮影しているなど感じました。地下鉄に行き交う人々の人間模様を、鋭いカメラアイでしっかりと切り取っています。一つのテーマに打ち込んで、見る者を退屈させないほどのバラエティーの豊かさも持っています。

<http://www.kazuosumida.com/>



第 12 回
「静かな時への誘惑」(写真展) 石川 博 雄 (いしかわ・ひろお)

1951年(昭和26)愛知県生まれ。1996年(平成8)『アサヒカメラ』4月号に「風の気持ち」発表。1999年(平成11)写真展「木花物語・あなたと暮らした街」開催。以後2001年(平成13)「木花物語・風と出会った時」、2002年(平成14)「静かな時への誘惑」、2004年(平成16)「月マツモノタチヨ・越中オウラ節」2009年「手のなかの詩」等、写真展多数開催、写真雑誌にも掲載される。愛知県一宮市在住。

この作品はなかなか味わいのあるモノクロ写真です。写真にはドラマ性がなければいけないというのが僕の持論ですが、石川さんの作品はただ単にきれいに撮っているだけでなく、その中に日常のドラマを感じさせます。モノクロの神髄をよく捉え、個性的で独特な写真世界を作り上げていることも見事です。

<http://blog.goo.ne.jp/gookoboretemoyukumono>



「青夏 1999年8月」

第 13 回
「海を見ていた一房総の海岸物語一」(写真集・写真展) 飯田 樹 (いいた・たつき)

1941年(昭和16)千葉県生まれ。千葉大学教育学部卒業。1984年(昭和59)竹内敏信に師事。翌年から故郷房総の海と人をテーマに撮影を続ける。1994年(平成6)千葉県民写真展グランプリ。1998年(平成10)日本写真家協会展優秀賞。写真展多数開催。2010年(平成22)第60回記念流形展竹内敏信賞受賞。日本写真協会会員、日本写真作家協会会員、流形美術会写真部委員、千葉県写真美術会顧問、千葉県写真連盟相談役ほか。千葉県東金市在住。

この作品は、千葉の房総の海をずっと撮り続けたものを一冊にまとめた作品集で、カメラワークがよく、海と人びととの関わりや、自然の表情を詩情豊かに写し出しています。その健康的な作風は現代の房総海岸に見るさまざまなドラマを表現しており、全編をとおして快い緊張感が伝わってきます。色彩的にも優れた作品です。



「古志の朝 8月 山古志村」

第 14 回
「古志の里II」(写真集・写真展) 中 條 均 紀 (なかじょう・まさのり)

1952年(昭和27)新潟県生まれ。東京農業大学卒業。1986年(昭和61)写真活動を開始。1987年(昭和62)から山古志村とその周辺の風景や風俗を取材し、1999年(平成11)写真集『古志の里』、2004年(平成16)『古志の里II』刊行。同年10月23日の新潟県中越地震で壊滅的被害を受けた山古志村の震災前の姿を記録する貴重な記録となった。同年新潟県長岡市にアトリエ“Shinla—シンラ—”建設。写真教室、コンテスト審査員、講演等の活動を行う。日本写真協会会員。新潟県長岡市在住。

これは、作者が山古志にずっと通い続けて撮ってきた作品で、ふるさとの素晴らしい風景を見続け、なおかつそれを撮り続けて心に残る風景写真を作りあげたことと、中越の大地震の被害により昔のような棚田が二度と見られないのではないか、そういう意味で山古志の文化財、自然の美しさが写真として残された大切な作品であると考え、いろいろな意味を含めて決定させていただきました。



「上州座繰り 2002年3月 群馬県勢多郡富土見村」

第 15 回
「薊の輝き」(写真展・雑誌掲載) 田 中 弘 子 (たなか・ひろこ)

1942年(昭和17)東京都生まれ。1992年(平成4)から4年間関東デニス協会ジュニアニュース誌広報写真担当以後写真活動を続け、日本写真家協会展などで入賞を重ねる。1998年(平成10)から群馬県の養蚕業の取材を始める。2005年(平成17)「薊の輝き」としてまとめた写真展と雑誌に発表した後も活動を継続、富岡製糸場世界遺産登録推進運動やシルク関係の著作に作品が使用される。日本写真協会会員、日本カメラ財団JCIIフォトサロン会員。東京都小金井市在住。

この作品は、特別な技法を使って見せるのではなく、薊を生産する人々と薊との関係を究明に写し取っています。さらに薊がいかに成長し、美しい糸になって育っていくか、その過程での造形的な美しさや色彩美の両面を表現しながら、一つの物語に作り上げたところが素晴らしい作品でした。



「陝西省 韓城市 2000年4月(黄土高原の村)」

第 16 回
「黄土高原の村／満蒙開拓の村」(写真集) 後 藤 俊 夫 (ごとう・としお)

1938年(昭和13)茨城県生まれ。茨城大学文学部文学科卒業後、茨城県立高校教員(英語)として勤務、写真部顧問をつとめる。1982年(昭和57)水戸市美術展に初入選。2001年(平成13)中国で独自の取材旅行を始め、2003年(平成15)から翌年にかけて写真展「黄土高原の村」開催、2006年(平成18)写真集「黄土高原の村／満蒙開拓の村」刊行。その後戦後の国内の開拓事業に目を向け、取材活動を続ける。日本写真協会会員、茨城県美術展写真部会員、水戸市美術家連盟会員。茨城県水戸市在住。

大版で映像効果をねらうような意図などとはほど遠く、こじんまりしたつくりの写真集ですが、一見、一読、さらに何度が頁を繰るごとに、悠久の大地の中に吸い込まれて、いのちの根源にふれるような感動を覚えます。風土への渴仰と共生に運命を託した農民への共感が伝わってくるのです。



「蘭盆勝会2 長崎市鍛冶屋町、崇福寺 1977年9月」

第 17 回
「長崎フォトランダムー長崎ば撮ってさらき、半世紀ー」(写真集) 小 林 勝 (こばやし・まさる)

1926年(大正15)長崎県生まれ。旧制長崎県立長崎中学校卒業。海軍電測学校に進み、長崎外国語学校を経て親和銀行就職。1960年(昭和35)国際写真サロン初入選以後、国画会、二科展、視点展等で入選入賞を重ねる。1961年(昭和36)長崎県展文部大臣賞受賞。1994年(平成6)長崎市教育委員会文化功労表彰。2007年(平成19)長崎大学付属図書館に約4万枚のフィルム原板、プリント写真等を寄贈。2008年(平成20)長崎県民表彰特別賞。林忠彦賞受賞を契機に国防、瀬戸内の歴史に惹かれ周南市周辺の取材旅行を続ける。長崎県長崎市在住。

この方は81歳とは思えない非常に新鮮な目で長崎を見ておられる。現代の長崎とかつての長崎、その時間の併置、これは単に風景を撮るだけといった類のものでは決してなくて、時代の変遷、時代の変化を撮るという明確な意識が感じられる。長崎のとくに被爆の風景を知っている人にとっては複雑な思いがあるでしょう。その辺の心の動きみたいなものがこの写真の中に出ていていると思います。



「壊れた脳とともに生きる—山田規敏さんの暮らし」

第 18 回

「ロマンティック・リハビリテーション〜夢みる力・20の物語〜」(写真集・写真展)
大西成明 (おおにし・なるあき)

1952年(昭和27)奈良県生まれ。早稲田大学第一文学部社会学科卒業。1992年(平成4)写真集『象の耳』で日本写真協会新人賞受賞。1999〜2000年(平成11〜12)写真週刊誌で連載した「病院の時代—パラッド・オブ・ホスピタル」で1999年週刊現代ドキュメント写真大賞、2000年講談社出版文化賞受賞。他に「日本の川100」「ひよめき」「ザ・モンキー」(共著)『ホネホネたんけんたい』(共著)「人形記」(共著)など。東京造形大学教授。日本写真家協会会員。東京都狛江市在住。

大西さんは、非常にシリアスな問題を、深い人間の理解といったものをベースに誠実に淡々と撮っておられます。決してセンチメンタルに涙を誘うのではない、その辺のギリギリのところを見事に捉えており、大変優れた写真家だと思います。こういう作品が今日の大きな時代の記録として残り、生きていくのだらうと思うのです。大いに賞賛したいと思います。



「田植えの後で」

第 19 回

「トオヌツ」(写真集・写真展・雑誌掲載) 小栗昌子 (おぐり・まさこ)

1972年(昭和47)愛知県生まれ。名古屋ビジュアルアーツ卒業。1995年(平成7)写真展「川のほとりで」開催。1999年(平成11)岩手県遠野市の土地と人に魅せられ移住。2005年(平成17)「百年のひまわり」で第3回ビジュアルフォトアワード奨励部門大賞受賞。2006年(平成18)日本写真協会新人賞受賞。2008〜09年(平成20〜21)写真展「トオヌツ」開催。2009年(平成21)写真集「トオヌツ」発行。2010年(平成22)『日本カメラ』1〜12月号に「フサバナの山」連載。岩手県遠野市在住。

遠野に住んでいる方々の様々な側面を捉えています。作者が10年住み、その中でコツコツと撮っていったというだけあって、その周辺の方々との間に非常にほつきりとした、しっかりとした人間関係が生まれています。日本の奥深いところにある、日本そのものというものを捕まえようとする意識が、この作品の根底にあるのではないかと思います。



第 20 回

「基隆」(写真集・写真展・雑誌掲載) 山内道雄 (やまうち・みちお)

1950年(昭和25)愛知県生まれ。1975年(昭和50)早稲田大学第二文学部卒業。1982年(昭和57)東京写真専門学校(現東京ビジュアルアーツ)卒業。森山大道に師事。自主ギャラリーイメージショップCAMPIに参加し写真発表を始める。ストリートスナップの撮り手として活動を続け、東京をはじめ世界各地で街の中の人にカメラを向けシャッターを切り続ける。写真展開催、写真集出版多数。1997年(平成9)写真展「英領 HONG KONG」で第22回伊奈信男賞受賞。東京都杉並区在住。

台湾の「基隆」という街の状況を描写している写真が続き、街の状況を一望できません。斜めの画面や粒子を荒すなどの表現からは、活気のあるざわめき、喧嘩がそのまま伝わってきます。自分の想い出と経験、体験といったものを迫力あるスナップで撮影、素直に表現したドキュメンタリー写真で、見る者を釘付けにします。

<http://michioyamauchi.under.jp/>



「2011年1月31日 墨田区 八広」

第 21 回

「東京 | 天空樹 Risen in the East」(写真集)

佐藤信太郎 (さとう・しんたろう)

1969年(昭和44)東京都葛飾区生まれ。1992年(平成4)東京総合写真専門学校、1995年(平成7)早稲田大学第一文学部卒業。共同通信入社。2001年(平成13)同社退社、翌年フリーランスとなる。一貫して都市をテーマに写真を撮り続ける。写真集に「夜光」「非常階段東京—TOKYO TWILIGHT ZONE—」など。他に写真展多数開催。2009年(平成21)「TOKYO TWILIGHT ZONE—非常階段東京—」で日本写真協会新人賞受賞。2013年(平成25)林忠彦賞受賞により千葉市第30回教育文化スポーツ等功労者表彰受賞。千葉県千葉市在住。

スカイツリーを中心にした極めて都会的な風景写真集といえるでしょう。戦後の古い建物の先にはスカイツリーの上部が見えたりする、味のある写真集になっています。スカイツリーの建設をひとつの材料にしたから風景と時間の経過を見ており、東京の極めて重要な「ドキュメント」が全てこの中にあるといえます。

<http://sato-shintaro.com/>

<https://www.facebook.com/shintaro.sato.35>

<https://twitter.com/satoshintaro>



(左)「つぶろさし 佐渡・新潟県」
(右)「道ゆき 高千穂・宮崎県」

第 22 回

「遠くから来た舟」(写真展)

小林紀晴 (こばやし・きせい)

1968年(昭和43)長野県茅野市生まれ。1988年(昭和63)東京工芸大学短期大学部写真科卒業。1991年(平成3)に新聞社カメラマンを経て独立。2000年〜2002年(平成12〜14)ニューヨーク滞在。写真家としてだけでなく、小説執筆など幅広く活動。写真集に「homeland」,「days new york」,「SUWA」【はなはねに】「kemonomichi」など、著書に「ASIA ROAD」,「写真学生」,「父の感傷」,「十七歳」,「リッピンバースデイ 3.11」(共著)、「メモワール 写真家古屋誠一の二十年」など多数。1997年(平成9)「DAYS ASIA」で日本写真協会新人賞受賞。東京工芸大学教授。東京都都在住。

日本というものが地球の中でどういう所に在るのか、その神々というものが私たちの生きる今日にも存在していることが伝わってきます。あちこちの神事やそれにまつわるものが、自分の村や町にも「これはあるね」と感じられます。写真の表現や構成にも工夫があり、白黒やカラー、カラーの中でもハイキーに仕上げた写真、アンダーに仕上げた写真などが混じっていて効果的です。

<http://www.kobayashikisei.com/>



「福島県双葉郡浪江町請戸 2013年8月2日」

第 23 回

「Remembrance」(写真冊子)

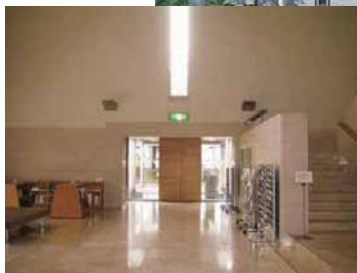
笹岡啓子 (ささおか・けいこ)

1978年(昭和53)広島市生まれ。東京造形大学卒業。2001年(平成13)写真家北島敬三らと、写真家自身による自主運営ギャラリー「photographers' gallery」を設立参加。「Difference 3.11」を機に2012年(平成24)から2013年(平成25)にかけて写真冊子「Remembrance」を刊行。2008年(平成20)「VOCA展2008」奨励賞。2010年(平成22)日本写真協会新人賞。2012年さがみはら写真新人奨励賞。

「Remembrance」とは記憶ということでしょうか。被災地の瓦礫の写真があります。この瓦礫の写真とそれが取り去られた後の静止した写真、そうしたものがよく表現され、時間的経過の記録がよくわかります。単にドキュメント写真、記録写真というものを超えて、記録の中、風景の中に人間の営みの凄さが感じられます。そういう意味で、時代の記録であり、自然の記録であり、自然の恐ろしさの記録であり、それに立ち向かう人間の力の記録であり、といった様々なことを感じさせてくれます。

<http://pg-web.net/>

周南市美術博物館は1995年(平成7)に開館しました。美術、歴史のほかに写真の常設展示室「林忠彦記念室」を持ち、本市出身の写真家林忠彦の作品や資料を展示しています。また常設展だけでなく企画展においても大規模な写真展を開催し、写真芸術を広く紹介しています。



〈林忠彦記念室〉

写真家林忠彦の芸術と生涯を紹介する常設展示室で、9つのコーナーがあります。



1. 譜

林忠彦の生涯を年譜で紹介

2. 想

秋山庄太郎、植田正治など交流のあった写真家のことばを紹介

3. 撮

「いま」を撮る、「ひと」を撮る、「とき」を撮ると題し、林忠彦の作風の変遷を、当時の雑誌『婦人公論』『小説新潮』などに掲載された作品で紹介



5. 東海道

晩年の大作「東海道」を紹介
代表作2点と、撮影時に使用したカメラ、三脚、車椅子等を展示



8. 映像コーナー

林忠彦の晩年の姿を「大いなる遺産—林忠彦の世界—」で放映

9. 作品展示

オリジナルプリント等を展示
随時展示替を行う

4. 継

アマチュア写真家の育成に力を注いだ林忠彦を記念して、平成3年度に創設された「林忠彦賞」を紹介



6. 林忠彦資料

林忠彦が遺したさまざまな資料を、随時紹介

7. ルパン

林忠彦が太宰治らを撮影した銀座のバー「ルパン」のカウンターを再現、雰囲気伝える。「太宰治」「織田作之助」「坂口安吾」を展示



展覧会 周南市美術博物館でこれまでに開催された写真展を紹介します。(抜粋)

平成7年度(1995)

- ◆残された楽園 ネイチャーフォトグラフィー展
- ◆第5回林忠彦賞「追いつめられたブナ原生林の輝き」岡田 満
- ◆常設展 林忠彦コレクション「日本の家元」



林忠彦×
カール・マイダンス展

平成8年度(1996)

- ◆林忠彦×カール・マイダンス展
焼け跡からの半世紀—日米フォトジャーナリストの観た日本
- ◆第6回林忠彦賞「サバナが輝く瞬間」井上冬彦



秋山庄太郎展

平成9年度(1997)

- ◆美しい記憶 秋山庄太郎展
- ◆第7回林忠彦賞「ぼくは、父さんのようになりたい」井上 暖

平成10年度(1998)

- ◆立木義浩展「親子の肖像」
同時開催「立木義浩の世界 光の人、舌出し天使、エチュード、EVES」
- ◆第8回林忠彦賞「天空の民」清水公代
選考委員会特別賞「戦後の山村—学校区のみなざし—」近藤祐一



立木義浩展

平成11年度(1999)

- ◆緑川洋一展「山陽道」～歴史薫る陸の道と海の道～
- ◆第9回林忠彦賞「Personal View(視線の範囲)」渡里彰造



星野道夫の世界展

平成12年度(2000)

- ◆星野道夫の世界展 21世紀へのメッセージ—Alaska風のような物語
- ◆第10回林忠彦賞「塩の道 秋葉街道」竹林喜由

平成13年度(2001)

- ◆細江英公の写真1950—2000
- ◆第11回林忠彦賞「ニューヨーク地下鉄ストーリー」角田和夫
- ◆林忠彦賞歴代受賞作品展



細江英公の写真

平成14年度(2002)

- ◆オードリー・ヘップバーン ボブ・ウィロビー写真展
- ◆第12回林忠彦賞「静かな時への誘惑」石川博雄
- ◆秋山庄太郎追悼展「平成・昭和の美女／男の貌」

平成15年度(2003)

- ◆川端康成 文豪が愛した美の世界(川端康成撮影の写真作品)
- ◆林忠彦オリジナルプリント展「日本の家元」



川端康成 文豪が愛した美の世界より
川端康成撮影の写真作品

平成16年度(2004)

- ◆第13回林忠彦賞「海を見ていた—房総の海岸物語—」飯田 樹
- ◆ハーブ・リッツ写真展
- ◆林忠彦オリジナルプリント展「日本の画家」

平成17年度(2005)

- ◆第14回林忠彦賞「古志の里II」中條均紀
- ◆現代美術のABC ～アートはあなたのそばにある～
(佐藤時啓+Wandering Camera、澤田知子、野村仁、やなぎみわ、デイヴィッドホックニー写真作品)
- ◆林忠彦オリジナルプリント展「長崎 海と十字架」

平成18年度(2006)

- ◆第15回林忠彦賞「蘭の輝き」田中弘子
- ◆世界遺産写真展III
- ◆第21回国民文化祭・やまぐち2006 美術展【写真】
- ◆林忠彦オリジナルプリント展「織田廣喜」



世界遺産写真展III

平成19年度(2007)

- ◆第16回林忠彦賞「黄土高原の村／満蒙開拓の村」後藤俊夫
- ◆林忠彦オリジナルプリント展「東海道」

平成20年度(2008)

- ◆第17回林忠彦賞
「長崎フォトランダム—長崎ば撮ってさらき、半世紀—」小林 勝
- ◆林忠彦オリジナルプリント展「長崎 海と十字架」



第21回国民文化祭やまぐち2006
美術展【写真】

平成21年度(2009)

- ◆第18回林忠彦賞
「ロマンティック・リハビリテーション～夢みる力・20の物語～」大西成明
- ◆常設展 生誕90年記念「林忠彦の世界」
- ◆林忠彦オリジナルプリント展「若き修羅たちの里—長州路」



生誕90年記念「林忠彦の世界」

平成22年度(2010)

- ◆第19回林忠彦賞「トオヌップ」小栗昌子
- ◆岩合光昭写真展「かけがえのない地球 いのちの輝き」
- ◆林忠彦オリジナルプリント展「カストリ時代」

平成23年度(2011)

- ◆第20回林忠彦賞「基隆」山内道雄
- ◆林忠彦賞20回記念写真展

平成24年度(2012)

- ◆第21回林忠彦賞「東京 | 天空樹 Risen in the East」佐藤信太郎

川崎市市民ミュージアム(2012)

◆林忠彦賞20回記念写真展

林忠彦賞が20回を迎えたことを記念し、2011年の周南市美術博物館に続き、開催しました。



岩合光昭写真展



林忠彦賞20回記念写真展



岩合光昭写真展「わこ」

平成25年度(2013)

- ◆第22回林忠彦賞「遠くから来た舟」小林紀晴
- ◆周南市誕生10周年記念 岩合光昭写真展「わこ」

平成26年度(2014)

- ◆第23回林忠彦賞「Remembrance」 笹岡啓子
- ◆林忠彦オリジナルプリント展「若き修羅たちの里—長州路」

日本写真協会賞

公益社団法人日本写真協会は、写真を通じて国際親善の推進と文化の発展に寄与することを目的として、1952年(昭和27)に設立された日本で最も権威のある写真団体です。

「日本写真協会賞」は、日本写真協会が、日本の写真界や写真文化に顕著な貢献をした個人や団体に対して贈る賞で、国際賞、功労賞、文化振興賞、年度賞、作家賞、学芸賞、新人賞の各賞があります。

林忠彦は、地域における写真文化の振興に顕著な貢献をしたとして、1996年(平成8)「文化振興賞」を受賞しました。



文化振興賞で授与されたブロンズ像
松永 真「メタルフリークス」

ブロンズ像 (裏表紙写真)

林忠彦賞受賞者に授与されるブロンズ像は、周南市出身の彫刻家、笹戸千津子氏によって制作されました。

笹戸千津子略歴

- 1948年(昭和23) 山口県周南市に生まれる
- 1970年(昭和45) 東京造形大学美術学科彫刻専攻卒業、同大学彫刻研究室にはいる
- 1971年(昭和46) 第35回新制作展に「き子」「腰かけるき子」初出品。以後毎年出品
- 1973年(昭和48) 東京造形大学彫刻研究室修了、彫刻家 佐藤忠良氏のアトリエで制作を始める
- 1974年(昭和49) 第38回新制作展新作家賞受賞
- 1976年(昭和51) 第40回新制作展新作家賞受賞
- 1977年(昭和52) 新制作協会会員推挙。「第1回彫刻6展」開催。以後、全国各地で個展、合同展を開催
- 1987年(昭和62) 第18回中原悌二郎賞優秀賞受賞
- 1993年(平成 5) 第7回神戸具象彫刻大賞展に招待出品、準大賞受賞
- 1998年(平成10) 「ブロンズの華 笹戸千津子展」開催(山口県・周南市美術博物館他全国6カ所巡回)
長野市野外彫刻賞受賞
- 1999年(平成11) 「佐藤忠良と笹戸千津子の足跡展」開催(滋賀県・佐川美術館)
- 2001年(平成13) 東宝宝塚ビルリニューアルオープンに伴いエントランスを飾るモニュメント「微風」制作
- 2004年(平成16) 「笹戸千津子彫刻展」開催(熊本県・つなぎ美術館)
- 2008年(平成20) 「笹戸千津子展 想いをかたちに」開催(宮城県・菅野美術館)
- 2011年(平成23) 「笹戸千津子 -継承するところざしー」開催(広島県・泉美術館)
- 2012年(平成24) 「佐藤忠良と笹戸千津子 -帽子とチコー」
(中原悌二郎記念旭川市彫刻美術館ステーションギャラリー)